

6. 学生への教育活動

6-1. 全学共通教育科目「現代の差別を考える 女性学・男性学」

学部生対象の教育として、女性研究者キャリア・デザインラボ特任准教授が、平成 20 年度及び平成 21 年度前期に、全学共通教育科目「現代の差別を考える 女性学・男性学」の講義のうち、各 2 回を担当した。

1 回目は、「大阪大学の男女共同参画」では、ジェンダー・スタディーズの歴史を簡単にレクチャーした後、大阪大学の現状として、学部、大学院（前期・後期）、職員の男女比のデータを示した。さらに、女性研究者の比率の上昇について、国家的取り組みであること、海外との比較データなどの資料を配付した。その上で、大阪大学の取り組みとして、研究支援員制度の仕組みを解説した。

2 回目は、「農業・農村とジェンダー」では、特任准教授の専門領域であった、日本の家族農業経営におけるジェンダーを題材に「性別役割分業」には必ずしも合理性があるわけではないことを解説した。「性別役割分業」は、単に男性が仕事・女性が家庭、という分担だけでなく、男性は理系、女性は文系という観念にもかかわるもので、この不合理性を理解することは重要である。

また、上記、「現代の差別を考える」のテキストとして、平成 21 年 3 月 31 日、牟田和恵編『ジェンダー・スタディーズ』（250 頁）が大阪大学出版会から発刊された。（右に示す。）このうち、「第 9 章 ジェンダーの視点からみる農業」を特任准教授が執筆した。本章も単に農業におけるジェンダーについて執筆したものではなく、戦後の高度経済成長やグローバル社会の中での農業セクターのジェンダー問題を解説し、最終的にやはり「性別役割分業」の問題に焦点化したものである。



6-2. 全学共通教育基礎セミナー「ジェンダーへの招待」

学部 1 年生対象の講義として、女性研究者キャリア・デザインラボ准教授が、平成 21 年度に基礎セミナー「ジェンダーへの招待」を担当した。

受講者は、学部生 7 名、その他、府内高校生 2 名を受け入れて、9 名であった。

講義内容は、学問におけるジェンダー・スタディーズの意義とその歴史、および大学における男女共同参画等であった。高校生も含めて、受講者の勉学意欲が高く、授業終了後には、参考図書、映像資料の貸し出しを行った。

6-3. 全学共通教育基礎セミナー「育児力を育む」

医学部保健学科の教員3名が、医学部以外の学部1年生12名、2年生1名（男性4名、女性9人）を対象に平成21年度行ったセミナーである。

成長記録や乳幼児の映像等の具体的な乳幼児の姿を通して、乳幼児期の成長発達の実態を理解すること、乳幼児および育児に関連するテーマに対する自主的な学習と演習を通じて、乳幼児に対する認識を深め、育児に関する将来の生活を考える機会とすること、を目的とした。

セミナーの概要は、以下の通り。

第1回 ガイダンス

第2回 乳児期の成長発達の特徴・ビデオ視聴

第3回 育児に関するテーマのグループワーク1回目

①離乳食の進め方

②家庭内で起こる事故と安全対策

③粉ミルク・紙おむつを使用した場合のコストとエコ

第4回 幼児期の成長発達の特徴・ビデオ視聴

第5回 育児に関するテーマのグループワーク2回目

第6回 育児に関するテーマのグループワークの発表と討議

第7回 演習①ベビーモデルを使用した乳児の衣類の着脱、おむつ交換・赤ちゃんの抱き方

②調乳と粉ミルクの試飲、市販の離乳食の試食

第8回 大阪大学たけのこ保育園での1日（9：00～16：00）見学実習

グループワークでは、3グループに分かれ、育児に関するテーマについて、インターネットや文献・資料を検索して、グループ内で話し合いながら、発表資料や媒体の作成を行った。その後の発表会では、育児に関する3つのテーマについてグループワークした内容を、パワーポイントを使用して、発表を行い、その後活発な質疑応答を行った。

また、演習では、1人ずつモデル、新生児人形を使用して、赤ちゃんの衣服の着脱、おむつ交換を行い、赤ちゃんの抱き方を実習した。



受講生の感想（抜粋）

- ・ 大学でこんなことが勉強できると思っていなかったなので、感激でした。
- ・ 今までぼんやりとした認識しかなかった乳幼児のことについて、しっかりした知識を得られたと同時に、育児の難しさ、大変さを改めて感じました。
- ・ これほど理論的なことから実践的なことまで学ばせてもらえると思っていませんでした。
- ・ 少子化といわれる昨今の日本社会ではあるが、子どもの教育だけでなく、子どもを教育する側への教育が重要であると思った。そんな中私はこのような貴重な経験ができて大変よかったと思っている。

今年度は受講人数 5～10 名で募集したところ、40 名の履修希望があった。保育所実習、学内演習の関係で、受講人数を絞る必要があり、13 名の受講となった。今後は保育所実習の日程の調整、および学内演習の進め方を工夫して、希望する学生の多くを受け入れることができるように検討している。

6-4. 医学部保健学科の保育実習

1) 保育実習の実施の経過

医学部保健学科では、2 年生の後期に開講している「小児看護対象論 II」の講義の中で、乳幼児の成長発達を学習した後、1 日間保育実習を実施している。少子化の影響のためか、きょうだいも少なくなり、身近に乳幼児と接する機会がほとんどないまま大学に入学する学生が年々増加している。子どもに対する具体的なイメージがないまま、講義で子どもの成長発達を学んでも、子どもを理解し適切な支援を実施することがむずかしくなっている。また、子どもには興味や関心があるのに、子どもに接する自信がなく、苦手意識を持つ学生も多い。

そこで、数年前から、豊中市の協力を得て、豊中市の保育所 14 箇所での保育実習を実施してきた。大学の「たけのこ保育園」が完成した平成 20 年からは、一部の学生の保育実習

を受け入れてもらうことになった。

2) 保育実習の目的と実習内容

保育実習の実習目標は次の通りである。

①実習クラスの子どもの生活行動を観察することで、そのクラスの子どもの成長発達段階の特徴がわかる

②保育士のクラスの子どもへのかかわりを観察することで、成長発達段階に応じた保育の実際を知る

③保育士の助言にそって、クラスの子どもへの遊びや話しかけができる

保育実習の前に、学生には乳幼児と接する時の安全や事故防止などの注意事項、自分の健康状態のチェック、保育実習での服装等のオリエンテーションを実施する。

実際には、4セメスターの講義の4コマを使用して、1日間（9：00～16：00）の実習を行っている。実習では、保育所で受け持ちクラスを決め、1クラス1名の学生が受け持ちクラスの乳幼児の世話や遊びを、保育士の指導のもとに実践する。

3) 「たけのこ保育園」での実習

20年度は、大学に保育実習の申し込みを行い、事前に園長の面談を受け、受け持ちクラスを決めた。父母の理解と不安の解消については、実習開始までに父母会での担当教員による実習内容の説明を行い、保育実習日と受け持ちクラスの担当学生の明示するようにした。

20年度の実習は、3名の女子学生と1名の男子学生の実習を予定していたが、男子学生が当日体調不良のために実習を辞めさせたので、11月14日に3名の女子学生が3つのクラスで乳幼児と1日過ごした。

21年度は、11月6日に4名（女子3名、男子1名）の実習を行った。

4) 保育実習での学習効果

保育実習での学習効果は、豊中保育所と「たけのこ保育園」で実習した学生82名の実習レポートの記載事項の分析を行い、評価した。

乳幼児の成長発達に関して、100%の学生が乳幼児の成長発達について記載し、認知的側面88%、対人関係78%、生活行動78%の記載があり、1日間の短い実習ではあるが、講義のすぐ後に乳幼児と接することから、乳幼児の成長発達について十分理解できたと思われる。

保育の実際では、96%の学生が記載しており、生活行動への援助88%、認知・運動機能への援助79%の記載であった。保育の専門家である保育士が、乳幼児にどのように働きかけているかを実際にみることで、子どもの発達段階や個性に応じてどのように対応する必要があるのかを学ぶことができたと思われる。

5) 学生の意見や感想から

学生の自由な感想や意見から一部を抜粋した。

- ・子どもは本当に未知の能力を一杯もっていて、成長発達の段階をみていくことにすごく興味を持った。子ども自身が自尊感情をもち育む保育とは、人間関係がベースに出来ており、感情や気持ちを出すことでその感情や気持ちを大事にしてもらえているという感覚を持たせることが大切だと学んだ。
- ・子どもはひとりひとり個性があり、それぞれの成長には個人差があるので、そういう点を十分に把握して接することがとても大切であるとわかった。保育士さんは、常に子どもたちの行動に目を配り、ささいなことでもいいところを気づいて褒めてあげていた。褒めることは正の連鎖になると思った。
- ・何もかも手助けしたくなるのをこらえて、子どもたちの力を信じて一歩ひいた所から見守るのが、子どもの成長につながっていくと思った。子どもたちは大人の真似をしようとするので、私たちは子どもの前で責任あるきちんとした行動をとる必要がある。
- ・小さい子どもたちと触れ合うことができ、その可愛さに心から惚れ込んでいる自分がいた。また、一生懸命に生きる子どもたちからたくさんの元気を分けてもらった気がする。